

氷蓄熱の時間率融解特性

植山哲平（うえやま てっぺい） 氷蓄熱技研 代表

1. はじめに

氷蓄熱の講座を始めるに当たって、まず最初に、氷蓄熱にとって、最も大切であり基本的である「時間率融解特性」について紹介したい。

このシリーズでは、「時間率融解特性」のようなテーマ毎に、これらに関する裏話や、エピソードや、種明かしも加えて紹介していくつもりである。

そんな訳で、このシリーズでは、脱線あり、蛇足あり、どこに飛ぶか分からない内容になるものと予想されるので、真面目な技術的な内容の中にも、楽しんでいただければ幸いである。

もう一つ付け加えて申し上げれば、わたしの携わっていた方式は、アイスオンコイルスタティック型であるので、この方式についての記述になることをお許しいただきたい。

2. 氷蓄熱との遭遇

昔々、ある所で、氷蓄熱に遭遇した。将に、未知との遭遇であった。

初めは、氷蓄熱の概念図を見ても何がなんだか分からない。今から思えば笑い話であるが、氷蓄熱のコイルが、水の中に浸かっているとは思ってもみなかった。

何しろ、氷蓄熱を知らない。さらに、氷蓄熱をどのように使うのかも分からない。見たことも聞いたこともないのである。

歌の文句じゃないが、「何がなんだか、分からない」状態であった。

参加のメンバーがまず最初に考えたことは、最上部にスプレーがあり、そこから散水してコイルの回りに氷を付けるのかな？は、自然な発想であった。

しかしこの発想も満更でなく、この方式の氷蓄熱方式が、その後発表された時には、同じ発想がやっぱりあったのだと、びっくり仰天驚かされた。

でも、「なるほど、さもありなん」と納得できる発想

ではある。

ところで、研修に行って見たはいいが、現物を見ても、水槽の中はスケスケで、底まで中が丸見えで、愛想もそっけもない。コイルがあるだけ。

あるはずのスプレーノズルもない。どうなっているの？これをどうするの？何がどうなるの？と？？？だらけ。

呆れるばかりにあっけらかんとした殺風景な構造であった。

ところが、このわけの分からない代物が、後で大活躍するすばらしい宝物になるとは、その時には思いもよらなかった。

また、このシンプルな構造が、丈夫で長持ち、メンテ

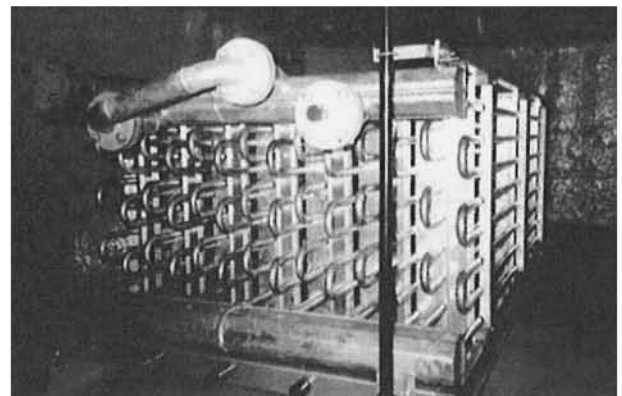


写真1 A社の氷蓄熱コイル

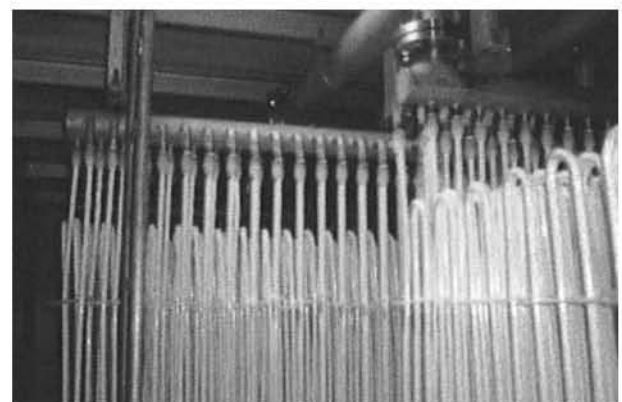


写真2 B社の氷蓄熱コイル